

鳥取大学動物医療センターにおける「てんかん」の診断成績

鳥取大学獣医画像診断学教室 准教授 柄 武志

はじめに:

てんかんは獣医療で比較的多くみられる脳の病気で、その診断はその後の治療の選択や予後に関係するためにとっても重要となります。てんかんの診断には脳波検出装置を用いた電気生理学的検査と脳の病変をみつける画像検査が行われます。これら検査のうち、鳥取大学農学部附属動物医療センターでは、computed tomography(CT)および magnetic resonance imaging (MRI)装置を用いた画像検査を実施することができます。今回、本動物医療センターで検査された65例のてんかん患者さんの診断成績について報告いたします。

てんかんとは、脳細胞のネットワークに起きる異常な神経活動のため、全身的または局所的に発作やけいれんを起こす病気です。てんかんの発生率は犬で1~2%(純血種によっては5%あるかもしれません)と比較的多くみられるのに対して、猫では0.5%とまれな病気です。てんかんは遺伝性に生じる可能性も考えられています。てんかんを診断する場合には、主に次の2つの病因を基にした分類を行い、画像検査がその分類に役立ちます。

- ①特発性てんかん:脳に明らかな器質性病変がなく、脳の深部で生じる突然の電氣的異常が原因で起きるてんかんです。
- ②症候性てんかん:脳に明らかな器質性病変(水頭症、脳炎、腫瘍など)があり、それが症状発現の原因となっているてんかんです。

つまり、本院においててんかんにおける画像検査の結果、「脳に異常がありません」と診断される場合もあり、この場合には特発性てんかんと診断となります。

てんかんのために本院にて検査を行った65症例を回顧的に調べた所、犬は60例、猫は5例と多くが犬の症例でした。65症例に対する画像検査の結果、28例(43%)は特発性てんかん、37例(57%)は症候性てんかんと診断されました。犬では、一般的に70%近くが特発性てんかんと診断されます。本院では、二次診療病院という特殊な環境から症候性てんかんが診断されることが多いものと思われます。特発性てんかんと診断された動物種は M.ダックスフンドとチワワが14%と最も多く、雑種(11%)、フレンチブルドッグ(11%)、T.プードル(7%)、猫(7%)と続きました。症候性てんかん37例で観察された脳の病変は、脳炎31%、水頭症22%、腫瘍13%、脳内出血10%、脳梗塞9%、その他15%となりました。

てんかんは脳細胞のネットワークに起きる異常な神経活動から生じますので、確定診断には脳波検出装置を用いた電気生理学的検査が必要となります。しかし現在、獣医療ではてんかんの診断において脳の異常を検出する画像検査が主流です。言い換えれば、電気生理学的検査ができない以上、てんかんの診断の決め手となるのは臨床症状であり、飼主さんの稟告は特に重要な情報源となります。てんかんの診断において獣医さんが飼主さんに求める情報は、「発作以外に臨床症状があるかどうか」です。特発性てんかんでは、発作後すぐに異常（ふらつき、意識がはっきりしないなど）がみられる場合もありますがすぐに改善することが多く、発作以外では全く神経学的な異常もなく通常の生活をしている場合が大半となります。一方、症候性てんかんでは脳に何かしらの異常があるために、発作以外にも行動や生活に異常や障害がみられるケースが多いです。

図 1 は特発性てんかん症例、図 2 は症候性てんかん症例の臨床症状をまとめたものです（各臨床症状の症例数はのべ数）。症候性てんかんでは全般発作（大脳両側にまたがる神経伝達異常で起こる発作）と部分発作（過剰な電氣的興奮が脳の一部に限定されて起こる発作）以外に、旋回運動や斜頸などみられましたが、約 80%の症例では臨床症状は発作のみでした。症候性てんかんでは全般・部分発作以外にも旋回運動、眼振、斜頸、ヘッドプレス（壁に頭を押し当てた状態で動かない）など多様な臨床症状がみられ、臨床症状が発作のみの症例は約 21%だけでした。一方、先天的に生じる脳の病気の中でも水頭症と診断された症例では、その約 83%が発作以外に臨床症状は示しませんでした。

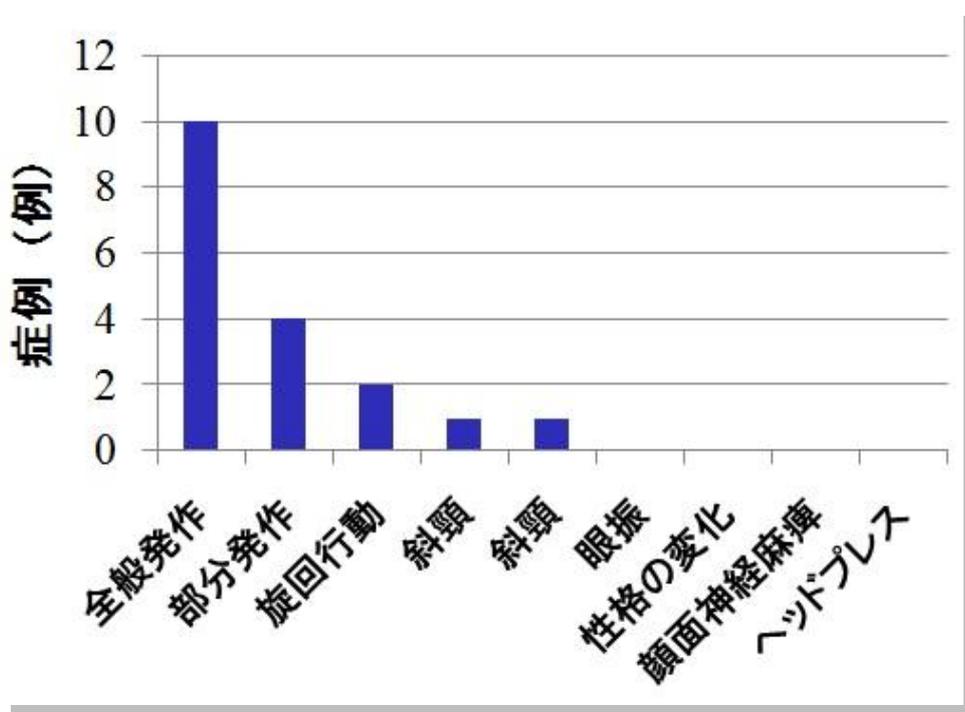


図 1 特発性てんかん症例の臨床症状

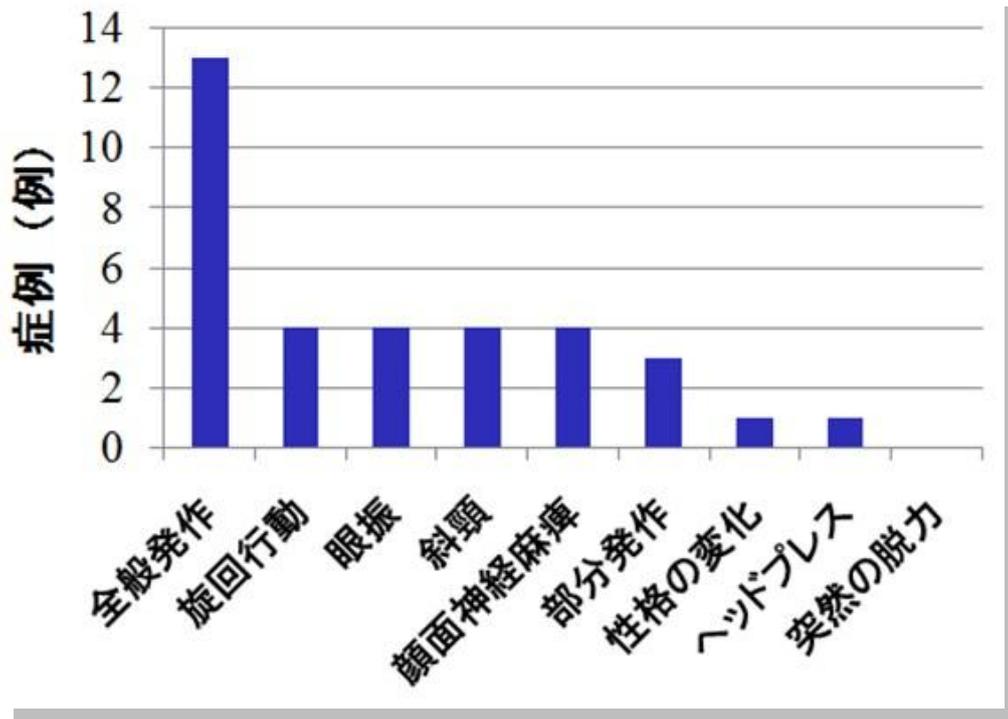


図 2 症候性てんかん症例の臨床症状

最後に:

てんかんを診断する上で、画像検査と同様に重要な情報源である稟告ですが、ここに獣医師からの目と飼主さんからの目による判断の違いが生じることはよくあります。水頭症など先天的奇形をもつ動物でよくみられる脳症状は、「動きがのろい」、「歩き方がぎこちない」、「歩行時によく転ぶ」、「何となくボーっとしている」などです。この行動は獣医師の目でみると異常行動なのですが、飼主さんの目では「この行動がかわいい」と感じたり、「これが普通と思っていた」と思うことにつながります。実際に、脳症状は「十犬十色」です。どんな機会でも結構ですので、動物病院にお越しの際には一度、いつもみられる行動に異常がないか獣医さんに確認してみてください。